

# ドイツさんが久留米にやってきた



青島が陥落し凱旋する久留米第十八師団（以下、写真は全て久留米市教育委員会所蔵）

## ・久留米最初の日

「(久留米市街地の) 通りは群衆で一杯だったが、国賓でも迎えるがごとく軍が細道を空けていた。町中を通る道はかなり長くて面白かった。何しろ私が初めて見る日本の町なのだ。日本の町は、夕方にはとてもきれいに見える。祭りみたいだ。どの木の家にも中から明かりの見える障子があって、まるで幻想的な提灯のようだ。」

(「エルンスト・クルーゲの日記」 生熊文抄訳)

大正3年(1914)10月9日午後8時11分、久留米駅にドイツ兵55名が降り立ちました。彼らは中国・青島周辺での激しい戦闘の末、9月下旬に日本軍の捕虜となり日本へ送られてきたのです。陸軍省は「捕虜に対しては敵視しないこと、自国のために忠勇を尽くして捕虜となったので、その境遇に同情する」よう第十八師団へ事前に通知しています。

列車の到着時間は予定より大幅に遅れたにもかかわらず、駅前や沿道は彼らを一目見ようと集まった市民でごった返していました。

「つやのある黒髪を高髷に結った愛らしい顔の小さな日本娘が物珍しそうに戸から顔を出して、驚いたような眼差しで我々に微笑みを送った。勇敢な小さな学童は、何か叫びながら下駄をカタカタ言わせて我々に並んでついてきた。この人々の中には生命が踊っていた。」

(「エルンスト・クルーゲの日記」 生熊文抄訳)



行軍中に束の間の休憩をとる青島のドイツ軍

下士と兵卒たちは憲兵隊と警察による警備の中、詰めかけた人々の間を縫うように二列縦隊で東へ向かいました（注）。隊列は、江戸時代以来の白壁造りの商家や町屋が通りの両側に軒先を連ねる今町、三本松町、通町筋を抜けて、日吉町の大谷派久留米教務所（現市立日吉小学校）に到着。一方、将校3名は第18師団の高級副官とともに市内の旅館で夕食をとり、京町にある旧久留米藩主有馬家の菩提寺である梅林寺に收容されました。

「ここ（大谷派久留米教務所）で寝た最初の夜は、全くの至福であった。我々はもう長いこと熟睡したことがなかったのだ」（「パウル・イーザーローへの日記」生熊文訳）。

5年3ヶ月に及ぶ久留米での捕虜生活の始まりでした。

## ・青島要塞陥落

これより遡ること約3ヶ月前のこと。セルビアの首都サラエボで起きたオーストリア皇太子夫妻の暗殺をきっかけに、それまで対立を深めていた英・仏ほかの連合国とドイツ・オーストリア＝ハンガリーなどの同盟国は全面戦争に突入しました。第一次世界大戦の勃発です。英国は、日英同盟に基づいて日本に参戦を要請、ドイツ、オーストリア＝ハンガリーに宣戦布告した日本は、久留米の第十八師団を中心とする約4万人を中国膠州湾に出兵しました。青島周辺での攻防戦を経て、10月31日にはドイツ軍要塞へ総攻撃を開始、激戦の末11月7日にドイツ軍は降伏しました。

この青島陥落の報を受けて日本国民は熱狂し、全国各地で戦勝を祝う様々な行事が行われました。久留米市でも、提灯行列や祝賀会が開催されています。最初に久留米にやって



中央広場に整列する久留米俘虜収容所バラック9・10のドイツ兵捕虜たち

来たのは、総攻撃前に捕虜となったドイツ兵たちでした。こうして久留米に設置された全国初のドイツ俘虜収容所へ、10月下旬に下士卒18名が追加到着。間もなく、ドイツ軍の降伏で多数の捕虜が発生したため、東京・名古屋・大阪・姫路・松山・丸亀・福岡・熊本の8市にも俘虜収容所が開設されました（12月には大分・徳島・静岡も開設）。

更に久留米へは11月15日に446名、その後も18名の捕虜が次々と収容されています。捕虜の増加に対応するために、大谷教務所と梅林寺（その後間もなく閉鎖）に加え、篠山町の料亭香霞園と高良台演習廠舎も収容所として使用することになりました。

### ・全国最大規模の収容所

当初、短期間で終結すると思われていた第一次世界大戦ですが、早くも長期化の色が濃くなります。一時的に民間施設を借り上げていた収容所では、借上げ費用の増大や警備の不備が問題となってきました。陸軍省の方針変更に従い、久留米でも三井郡国分村の陸軍久留米衛戍病院新病舎跡<sup>えいじゅ</sup>を再整備、長期収容に対応することになりました。

新たな久留米俘虜収容所には、分置されていた久留米の収容所だけではなく、熊本収容所、福岡収容所（一部）の捕虜が続々と到着します。これにより、久留米収容所は1,319名を収容する全国でも最大規模のドイツ兵捕虜収容所となったのです。

（注）大正3年10月10日付の福岡日日新聞では、軌道車で移動した旨の記述がある。